

# アメリカ合衆国の大学と人種問題

〈アメリカ合衆国〉

宇田 光

私のみた  
海外の大学事情

筆者は一九九四年の秋から一年間にわたって、アメリカ合衆国に滞在した。お世話になった先は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCSB）である。

筆者は大学院生時代の八五年には、UCAに留学している。偶然にも二度にわた

り、カリフォルニア大学の別々のキャンパスで過ごす機会を得たわけである。

前回の留学当時は独身であったし、学生という立場であった。最初はLAのアパルトの一室を借りて、韓国人のご夫妻と暮らした。後に別のアパルトに引っ越したが、この時の同居人はロシア人だった。渡米当時には、LAという都会がどんな特徴をもつ所なのか想像もつかなかった。だが、後から振り返って考えてみると、確かに私は多民族都市に住んでいたのだな、と思う。今回生活の拠点としたのは、富裕な白人層の目立つ町のアパルトで、家族を連れての滞在であった。

## 白人教授の挑発

UCSBの大学院で、教育心理学の授業に参加した時のことである。その授業の受講生は、私を除くと院生ばかり六名ほどで、そのうち一名は黒人女性であった。ある時、教授（白人男性）の質問に対して、その黒人女性が「それは私には難しいです。」と

言うのと、教授が「なるほど。それは君が黒人で、不当に差別をされて学習の機会を奪われてきたからだ、というわけかね。」と素早く切り返した。

私は一瞬ドキッとして、「こんな事を言っても大丈夫なのかな」と思って他の学生の顔を見回し、彼らの反応を探った。意外なほど平静である。

後になって、挑発こそがこの教授の「得意技」であるということがわかって、納得した。学生のやる気をいかに引き出すかは教師の腕の見せ所である。良い意味では、ショック療法的な効果を期待しているわけで、院生たちに対する教授の期待や熱心さのあらわれだとも言える。しかし、私がつまらな発言はしなかつただろう。差別にふれる言動を避けようとしたに違いないと思うからである。

## 積極的優遇措置の廃止

積極的優遇措置（アファーマティブ・ア

クシヨン：以下A A）とは、大学への入学や就職の際に別枠を設けるなどのかたちで、従来「差別されてきた側」である女性や黒人などを優遇するよう、国が義務づける方法である。このおかげで、確かに学生の人種別比率などの格差が是正される効果は出たようである。

しかし、今度は「差別してきた側」である白人側が、A Aは不当だという主張を始め、その撤廃を求めている。本来なら得られたはずの職が、A Aのため得られない。

本来なら入学できたはずの大学に入学できない。こうした経験が、「差別してきた側」のイライラをつのらせているのである。

また、カリフォルニア州の場合、メキシコなどからの移民の流入が続いている。こうした外国人でも、公立学校は引き受けて教育をほどこさねばならず、ただでさえ厳しい公立学校の財政事情はさらに悪化している。こうした事情もあって、移民に対するかつてのような寛容さは失われてきているという。

中国、韓国、台湾やシンガポールなど、アジア諸国から輸入された製品の氾濫には驚かされた。アメリカ人たちのの中に、職場を外国に持つていかれてしまうという不安も、少なからずあるに違いない。

A A廃止の提案は、意外に簡単に通過してしまった。キャンパスでの反対運動も、UCSBに関する限りは、さほど派手なものではなかった。

## ↑EYES

私の滞在中、全米はシン普森裁判で揺れていた。元プロフットボールのスタープレイヤーであった黒人のO・J・シン普森氏が、離婚した元の白人の妻とその友人の男性を殺害した疑いをもたれている事件である。殺人事件など珍しくもないこの国で、当時誰もが裁判の成り行きを見守っていた。テレビで「今日のO J」というニュース番組を毎日放映していたほどであった。

有名人のからむ事件の報道のあり方、家庭内暴力、陪審制度の是非など、確かにこ

の事件は多くの問題を投げかけた。だが本件が目目された最大の理由は、やはり人種問題であったらう。

被告が無罪の評決を受けたのは、筆者が帰国した直後であった。その瞬間、テレビの前で見守っていた被告に同情的な黒人たちは、一斉に歓声を挙げた。一方、白人を中心とする人たちは、一様に肩を落とした。この見事なまでに対照的な映像は、繰り返し放映され、人種間の摩擦を象徴的な示していた。

## 『ベルカーブ』はなぜ売れたか

『ベルカーブ』は、一九九四年に発売されるや五十万部以上を売るベストセラーとなり、論争を引き起こした本の題名である。ベルの形の曲線とは、正規曲線のことである。広辞苑をやや薄くしたようなサイズの単行本であり、専門用語の多い、とても一般向けとは言えない代物である。にもかかわらず、パンケーキのごとく売れた。

問題となったのは、「知能には人種的に

みて（特に白人と黒人とで）明らかな分布上の差があり、それは遺伝的に決定されている。教育では補償できない。」という主張である。つまり、簡単に言えば、白人の方が、黒人よりも遺伝的に優れているのだという主旨である。現代の発達心理学の教科書を開くまでもなく、彼らの主張は、いかにも時代錯誤な発言と思える。

しかし、このような内容の本がベストセラーになった事実には、注目すべきであろう。人は、自分にとって都合の良い情報を求めがちである。笑い話だが、野球の熱狂的なファンが、ひいきの球団がナイターで負けた翌朝に、あらゆるスポーツ紙を買ってきて、どれか一紙にでも「勝った」と書いてないかを丹念に調べるといふ。ちょうど同じような動機が、『ベルカーブ』の背景にもあると言えるだろう。言い換えれば、白人層の間に、「我々は優秀なのだ」という情報を欲しくてたまらない心理が高まっていると見ることが出来る。つまり、AAの廃止ともつながる話なのである。

なお、筆者の一人のヘルンスタイン教授は、もともとハーバード大学の心理学者で、なんとスキナー教授の弟子で行動主義者だったようである。しかし、後に「スピアマンの一般知能因子（*g*）」に心酔するようになったと言われている。

### サラダボウル

アメリカはよく「人種のるつぼ」にたとえられてきた。しかし、それは昔の話で、今は「サラダボウル」というのだという。つまり、様々な移民が自由なこの国にやってきて、互いに文化交流をし、融合して新しいものが生まれる。これがるつぼのイメージである。ところが、今はいくらかきまぜても結局、個々の要素はそのままの形や味を保ったままで残っている。いつまでたっても、溶け合って新しい物に変わる様子がない。それぞれの民族が自分の母国語を話し、母国の生活様式を通そうとする、というわけである。

多様さを特徴とするアメリカという国の

事情を語るには、私の得た経験や知識は、いかにも不十分である。また、本シリーズは、外国での大学事情を語るという趣旨であるので、ややはずれた内容になってしまったかもしれない。しかし、アメリカの大学事情全般に関しては、既に比較的広く知られている。そこで、滞在先がカリフォルニア州であったこともあり、人種問題とからめて、私の体験を紹介する形を取らせて頂いた。お許し願いたい。

うだ・ひかる

松阪大学・教職課程

